

平成 29 年度 【 学園研究費助成金 < B > 】 研究成果報告書

学部名 国際コミュニケーション学部

フリガナ イケ サヤ
氏名 池 沙弥

研究期間 平成 29 年度

研究課題名 公共の場における多言語政策：駅の言語景観から多民族共生を考える

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	池 沙弥	国際コミュニケーション学部	准教授
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

本研究は駅の言語景観から、グローバル社会における現代日本の多言語サービスの実状を記録・分析し、多民族共生の観点から観光事業の発展のために必要な多言語サービスの在り方を提示することを目的とする。日本の代表的な観光地である京都、首都東京、そしてその中継地としての役割を果たす名古屋の駅で、様々な情報がどのような形で非日本語話者に提供されているのかを記録し、情報提供の公平性と適切性を明らかにする。また、3 都市間での言語サービスを比較するとともに各鉄道会社間における言語サービスの差を明確化することでより一貫性のある言語サービスの構築を提示する。今回は特に観光客に向けた情報に焦点を当て、迫りくる東京オリンピックに向けた観光事業への貢献を目指す。

2. 研究の推進方策 (300 字程度で記述)

京都駅、名古屋駅、東京駅の駅を共有している各鉄道会社の言語表示言語表示をすべて記録する。具体的には：駅ホーム、改札付近、切符売り場、コンコース、観光案内所で表示されている言語情報及び絵記号を使ったピクトグラム情報をすべて写真記録する。今回は特に観光化の進んでいる京都と、本学の位置する名古屋との比較から分析していく。
収集した写真データを情報の種類（名称・方向・依頼・警告・案内・その他）と言語の種類（日本語・英語・中国語・韓国語・その他）の観点から分析し、各駅・鉄道会社で表記の仕方及び提供言語にずれがある情報を明確にすることで今後の多言語政策への提言を出す。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

京都駅、名古屋駅、東京駅でそれぞれ記録した約2,300枚の言語表記の写真のうち、京都駅と名古屋駅の表記約1,800枚を分析対象とした。多言語分析の方法として、まず(1)完全多言語、(2)部分的多言語、(3)補助的多言語、(4)単一言語に分類し、さらにそれを対象読者(観光客など一時利用者・定期利用者・従業員)、情報の種類(地理案内・警告/依頼・情報)、表示されているマテリアルの種類(一時的・永続的)の観点から比較した。

結果として、鉄道会社(JR、市営地下鉄、近鉄)の規模によって表記の数と表記の仕方は違うが京都駅と名古屋駅では全体の表記数そのものは大きく変わらなかった。両駅ともに、もっとも多言語化が進んでいたのは方向・場所に関する地理案内表記であるが、鉄道各社による多言語政策の違いは浮き彫りになった。もっとも多言語化に努めていたのが近鉄であるのに対し、JR、特に新幹線の方は2言語政策(日本語・英語)を明確に打ち出しており、英語以外の多言語の使用は認められなかった。おなじJRでも在来線では京都駅のほうが多言語化が進んでいた。各鉄道会社でもっとも単一言語(日本語)に留まっていたのは緊急の際に必要な器具の表示(非常電話、消火器など)と、観光客ではなく定住者対象の情報であった。

このことから、JR新幹線は各地で統一された2言語表記、JR在来線はニーズアナリシスに基づく需要に応える言語表記、近鉄はアジア圏言語を含めた多言語表記に努めていることが明らかになった。また、観光客に向けての多言語化は各鉄道会社で進められているが、日本語を話さない定住者に向けての多言語化は非常に低くとどまっていること、危機管理対策としての多言語化もまだまだ改善の必要があること、同じ情報でも鉄道会社によって表記が違い、鉄道会社間の協力体制はあまり見られないこと、などが表面化した。

4. キーワード (本研究のキーワードを1項目以上8項目以内で記載)

①言語景観	② English as a Lingua Franca	③	④
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他○名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

今回の調査結果は以下の国際学会で発表された。また、その内容を ELF Journal 及び社会言語学に関する学術誌に発表予定である。

Saya Ike, ELF in Linguistic Landscapes of Japan: Multilingual Services, paper presented at The 10th Anniversary Conference of English as a Lingua Franca (14 June 2017), University of Helsinki, Finland